

大学生の服装に交通手段が与える影響

ー ジャージ・スウェットの受容度に着目して ー

谷口 綾子¹・瀬藤 乃介²・二神 克也²・飯野 雅貴²・岩岡 宏樹²・
川嶋 優旗²・柴田 峻平²・高木 力貴也²・ダシドンドグ オノンバイル²・
日高 大志²・佐々木 洋典²

¹正会員 筑波大学大学院 システム情報工学研究科 (〒305-8573 茨城県つくば市天王台1-1-1)
E-mail: taniguchi@risk.tsukuba.ac.jp

²学生会員 筑波大学大学院 システム情報工学研究科 (〒305-8573 茨城県つくば市天王台1-1-1)
E-mail: s1620569@u.tsukuba.ac.jp

本研究では、大学生の通学交通手段と服装規範の関係性を検証するため、運動着やリラックスするときの服装としてジャージ・スウェットに着目した4つの仮説を措定し、関東の5つの大学の大学生を対象としたアンケート調査、観察調査、ならびに茨城県内高校3年生対象のアンケート調査を行った。その結果、以下の知見を得ることが出来た。1)人目を気にする度合いが高い学生ほど「服装の規範(理想)」と「着ていけるか(現実)」のズレは小さい、2)バス電車等の公共交通では「服装の規範」と「着ていけるか」のズレが小さい、3)理想と現実のズレが大きい大学では実際のジャージ・スウェット率が高くなる、4)ジャージやスウェットを着ている大学写真の高校生によるイメージ評価は、普段着のそれよりも低くなる。

Key Words : student's clothes, travel mode choice, social norm for clothing, sportswear and travel mode

1. はじめに

衣食住は人間生活の基本要件である¹⁾。中でも「衣」は、毛皮を持たない人間の体温調節機能として重要な役割を果たすのみならず、地位や職業を表したり、生活を豊かに彩るものでもある。

我々は常に、その日の予定や訪問先を考えて服装を選択する。この際、多くの場合、我々は社会的着装規範²⁾ (公的に定められてはいないが、大多数の人が従う着装規範:以下「服装の規範」と呼称)を考慮している。人前に出るときは整った服装を心がけるだろうし、目上の人と会合するときには、運動着等のラフな格好は不適切であろう。このような服装の決まり事は、制服など公的に定められているものだけでなく、多くの人が従う社会的規範としても存在している。このように、私たちの被服行動は「服装の規範」によっても決定されるのである。

被服行動や着装規範に関する研究は、主に心理学や繊維業界に関連した分野で進められている(例えば文献³⁾)。また、大学生などの現代の若者の被服行動や自意識に着目した記述的研究としては、牛田⁴⁾、岡田⁵⁾、松原⁶⁾な

どが報告されている。また、泉⁷⁾は、高齢者の着装感情や服装への関心度と健康状態との関係報告している。

谷口ら⁸⁾は、大学生の服装が大学の景観に与える影響を定量的に計測し、リラックスウェア、運動着として多用されるジャージやスウェットの着用は、大学の景観にそぐわないと評価されることを報告している。また、ジャージやスウェットで大学に通学する学生は、そうで無い学生に比べ、授業への遅刻や授業中の居眠りが多く、課題の提出等も遅れがちであり、服装が授業態度に関係していることを示している。この中で、谷口ら⁸⁾は通学交通手段とジャージ・スウェットの着用率との関連性を検証することを今後の課題として挙げている。

ここで、冠婚葬祭やビジネス、制服といった明確な服装規範・服装指定が無い状況(例えば大学への通学やデパートでの買い物等)において、服装の規範が存在するのか、存在するとしてその規範に従っているか否かをどのように評価するのかについて考えてみたい。評価は、自らが自分の服装をどう考えるかという主観的な評価と、周囲との比較や社会的規範の度合いから調査者が評価する客観的な評価の二つがあり得る。例えば銀座のデパートに買い物や食事に行く場合、普段着よりもすこしきちん

とした格好を心がけるのではなかろうか。つまり、多くの人々は「銀座に買い物に行く」場合の服装の主観的な規範を有していると考えられる。一方で、銀座で買物をしている人々の服装が、規範に従っているかを観察等の方法で客観的に評価することは至難の業である。なぜなら、現代人の衣服の好みは極度に多様化しており、その人の衣服が「普段着よりすこしきちんとした格好」であるか否かを判断することは非常に難しいからである。ぼろぼろに穴の空いた衤の付いたデニムをカッコいいと感じる人もいるし、外出時は必ずジャケットにネクタイ着用でないと感じない人もいる。またある人はヒッピーの格好をおしゃれだ、と評価するのが現代である。個々人の服装の好みを考慮した着装規範の評価を観察調査で客観的に行うことは困難なのである。

そこで本研究では、一般に運動あるいはリラックスした時に着用すると考えられるジャージ・スウェットに着目することとした。ジャージ・スウェットは、場合によっては「だらしがない」と捉えられることもあり、フォーマルな場で着用する人は少ないと考えられるため、明確な服装規範・服装指定が無い状況における服装規範の有無や服装許容度を観察調査にて計測するのに適していると考えたのである。また、移動目的や年齢、職業によっても服装規範は大きく異なると考えられる。これらを制御するため、本研究では「大学生の通学」に着目することとした。

大学生の立場で大学通学時の服装を考えると、大学は本来学業の場であるので、理想としてはある程度きちんとした服装で行かなければならない。が、現実的には面倒くさい、今日くらいはまあいっか、と多少だらしがない服で行ってしまう状況は少なからずあり得る。皆がこのように考えると、谷口らの既往研究⁸⁾より、大学内の景観が悪くなる等の社会的悪影響にもつながりかねない。これはいわゆる社会的ジレンマ状況である。また、我々が外出するときには必ず服装を選び、かつ、必ず何らかの交通手段を使用する。しかし、服装と交通手段の関係性は既往研究⁸⁾からも明らかにされていない。

よって、本研究では、明確なドレスコードが無く服装の自由度が高いものの、本来的には学業の場である大学を対象として、大学生の通学時の服装の理想と現実のズレを調査するとともに、そのズレと交通手段の関係について、関東近辺の大学の学生を対象としたアンケート調査により定量的に把握することを目的とする。

2. 作業仮説

本研究では、既往研究²³⁾で定義されている以下の四つの概念を用いることとした。

- 1) **公的自己意識**：特に自己の服装や髪型など他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける意識
- 2) **服装の規範**：公的に定められてはいないが、大多数の人が従う着装規範
- 3) **服装許容度**：その服を着ることができるかの度合い、着ていけるか
- 4) **服装の理想と現実のズレ**：「服装許容度」と「服装の規範」の差

本章では、これらの概念を用いつつ、文献 8) で今後の課題として挙げられている大学生の服装と通学手段の関係性、ならびに服装が大学イメージに与える影響に関する 4 つの仮説を掲げた。以下にそれぞれについて詳述する。

(1) 仮説 1：公的自己意識・服装の規範・服装許容度

公的自己意識（以下、人目を気にする度合いとする）の高い人ほど「服装の規範」と服装許容度（以下、「着ていけるか」）の乖離（以下、ズレとする）は小さくなる。

人目を気にする度合いの高い人は大学に行くのにスウェット・ジャージでもまあいっか、と思うことは少ないのではないかと考えた。アンケート項目より通学手段別に人目を気にする度合いとズレの大きさの間に相関があるかを検証する。

(2) 仮説 2：服装の規範・服装許容度のズレと交通手段

「服装の規範」と「着ていけるか」のズレは交通手段によって異なり、自転車が最も大きく、徒歩、クルマ、バス、電車の順に小さくなる。

仮説 2 は仮説 1 に基づくことで導かれる。他者に見られる要素が強い公共交通である電車、バスは「服装の規範」が高くなると考えられる。特に電車はより人目につくということでバスより高くなると想定した。また、自転車は人目につくという点以外にも、運動要素を伴う交通手段であり、汚れやすい等の要素も含んでいるので、これらを考慮して「服装の規範」が一番低くなると考えた。徒歩は自転車と同等の要素を含むが、運動要素も自転車よりは低いので、この位置とした。クルマは運動を伴うものではないが、公共交通ではないので、徒歩より高く、バスよりは低く設定した。

「今日は電車で登校するから普段着を着よう」というように人目につく交通手段（電車、バスなどの公共交通）を利用するときの方が「服装の規範」と「着ていけるか」のズレが小さくなるのではないかと考えた。従って、「服装の規範」と「着ていけるか」のズレは自転車、徒歩、クルマ、バス、電車の順に小さくなるのではないかと考えられる。

(3) 仮説 3：服装の規範・服装許容度のズレと大学生のジャージ・スウェット着用率

「服装の規範」と「着ていけるか」のズレが大きい学生が多い大学ほど、実際に学生のジャージ・スウェット率が高くなる。

ここで、ジャージ・スウェット率は、実際にジャージ・スウェットで大学に来ている学生の割合のことである。つまり、大学生アンケートで調査する「服装の規範」と「着ていけるか」のズレが、実際に学生の服装選別に表れているのかを観察調査を用いて調査する。

(4) 仮説 4：ジャージ・スウェット率と高校生の大学イメージ評価

ジャージ・スウェット率が高い大学ほど、高校生からの大学のイメージは悪くなる。

谷口らの研究により、ジャージ・スウェットでの登校は、大学の景観に悪影響を及ぼすことが示されており、大学の景観のイメージは直接、大学のイメージに置き換えられるのではないかと考えた。そこで、大学のイメージを最も強く描いていると思われる高校生を対象に大学のイメージをアンケート調査し、仮説 3 で検証される実際にジャージ・スウェットで大学に来ている学生の割合と高校生からの大学のイメージに関係性があるのかを調査する。

3. 調査方法

(1) 大学生アンケート

a) 調査概要

仮説 1 と仮説 2 を検証するため、大学生を対象としたアンケート調査を実施した。アンケートは仮説の妥当性やアンケート調査項目の信頼性を確認するため、本調査を行う前にプレアンケート調査を行うという二段階で実施した。調査概要は以下の通りであり、表-1 に本調査の対象大学、講義名、サンプル数、調査実施日を示す。

i) プレアンケート調査

調査対象：交通運輸政策を受講している学生
 実施日：5/19 (木) 調査方法：質問紙調査
 サンプル数：77 人

ii) アンケート本調査

- ・調査対象：東京大学、東京工業大学、慶應義塾大学、筑波大学、東京理科大学
- ・調査方法：質問紙調査
- ・サンプル数：426 人

b) 質問項目

アンケート本調査では表-2 に詳述する以下の 5 項目について設問を設けた。公的自己意識を測定する方法としては、「現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について」(岡田 1999) において自己意識の測定

表 1 アンケート本調査概要

大学名	講義名	サンプル	実施日
東京大学	都市交通システム計画	49人	5/25(水)
東京工業大学	国際開発プロジェクト特論	29人	5/26(木)
筑波大学	進化ゲーム論	60人	5/30(月)
筑波大学	水環境論	44人	6/1(水)
慶応義塾大学(三田)	計量経済学	53人	6/6(月)
慶応義塾大学(日吉)	統計学	78人	6/6(月)
東京理科大学	交通計画	113人	6/16(木)



図 2 ジャージ・スウェットの例

表 2 大学生アンケート質問項目

個人属性	・学年 ・性別：男性/女性 ・国籍：日本人/外国人
学生生活	・一人暮らしかどうか ・通学時の交通手段 ・衣類への出資金額 ・服装に悩む頻度 …等10項目
人目を気にする度合い	・自分が他人にどう思われているか気になる ・自分の容姿を気にする …等10項目
大学に着ていけるか	・例) 電車に乗ってジャージ・スウェットを着て大学に行くことができるか。
服装の規範	・例) 徒歩でスウェット・ジャージを着て大学に行くことがふさわしいか。

法としても採用されている菅原 (1984) が邦訳した自己意識尺度⁹⁾のうち、「人目を気にする度合い」を測定する 11 項目を採用した。今回調査対象としている服装 (ジャージ・スウェット) については、いくつか例として写真 (図-2) を添付し、アンケート回答者が服装をイメージしやすいよう工夫を行った。

(2) 大学生の服装観察調査

「服装の規範」と「着ていけるか」の間のズレの度合いが大きいほど、スウェット・ジャージでの通学が実際に増えるということを検証するため、各大学の食堂と図書館において、入り口から入ってくる学生のうち、ジャージ・スウェットを着用している人数を実測調査した。尚、日本人の学生以外 (留学生、教授等) は除外した。

- ・調査対象：各大学の食堂・図書館
- ・調査時間：食堂-各大学昼休み開始時からの 30 分間



図3 普段着の写真(左), ジャージ・スウェットの写真(右)

表3 高校生アンケート質問項目

個人属性	<ul style="list-style-type: none"> ・性別：男性/女性 ・進学希望の有無 ・文理選択 ・所属している部活動
人目を気にする度合い	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が他人にどう思われているか気になる ・自分の容姿を気にする…等10項目
大学に着ていく服装のふさわしさ	<ul style="list-style-type: none"> ・この大学に行きたいか ・服装が大学にふさわしいか ・不快/快い ・恥ずかしい/誇らしい

図書館-16:30~17:00¹⁰⁾

- ・調査方法：カウンターを利用した実測調査
- ・サンプル数：4990人
(東京大学 618人, 東京工業大学 780人, 慶應義塾大学 1378人, 東京理科大学 912人, 筑波大学 1302人)

(3) 高校生アンケート

ジャージ・スウェットで大学に通っている人が多いと、高校生からの大学のイメージが悪化するのかを調査する。

- ・調査対象：高校3年生(茨城県内の公立高校)
- ・調査方法：質問紙調査 ・サンプル数：286人

ジャージ・スウェットを着用した学生の写真(図-3左)または普段着を着用した学生の写真(図-3右)が掲載された2種類のアンケート用紙のいずれか1種を回答者にランダムに配布し、回答終了後その場で質問紙を回収した。(アンケート項目の詳細は表-3に示す)

なお、写真は筑波大学 3B 棟前で、普段着とジャージ・スウェットを着用した大学生が写っている写真をそれぞれ1枚撮影した。ここで、対象者を高校3年生としたのは、大学へのイメージを最も重視するのは大学に進学する高校3年生であると考えたためである。

4. 調査結果と考察

(1) 仮説1の検証

仮説1は、人目を気にする度合いの高い人ほど「服装の規範」と「着ていけるか」のズレは小さくなるという

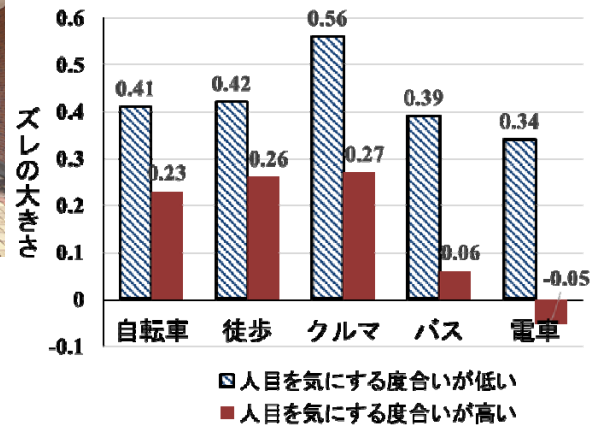


図4 通学手段別「服装の規範」と「着ていけるか」のズレの大きさ
ものであった。この検証では、まず、被験者を人目を気にする度合いが高いグループと低いグループに分け、交通手段と服装ごとにその差の平均値を比較し、2つのグループでt検定を行う。これによりジャージ・スウェットで学校に来ることをふさわしくないと考えているが実際には着用してしまう、というジレンマを引き起こしている原因が、人目を気にする度合いであると解明することができると考えた。分析の結果(図-4)、自転車、徒歩、クルマ、バス、電車の順に、ジャージ・スウェットを着用してその交通手段を使うことがふさわしくないと考えられていることが分かった。これより、人目を気にする度合いの高い人ほど「服装の規範」と「着ていけるか」のズレは小さくなるという仮説1が検証された。

(2) 仮説2の検証

仮説2は、「服装の規範」と「着ていけるか」のズレは交通手段によって異なり、自転車が最も大きく、徒歩、クルマ、バス、電車の順に小さくなるというものである。この仮説を検証するために、一元配置分散分析を用いる。一元配置分散分析とは、3つ以上の母集団についての平均値に有意差があるかどうかを調べる方法である。服装別にデータを3つに分け、それぞれのデータについて分析をする。この分析の帰無仮説は「5つの交通手段の「服装の規範」と「着ていけるか」のズレの平均値に差はない」である。帰無仮説が棄却された場合、「服装の規範」と「着ていけるか」のズレに対する交通手段による効果が有意となる。よって、ズレの平均値の違いは交通手段の違いによるものといえるので、仮説2を検証することができる。検証の結果、統計的に有意な差は示されず、そのズレは交通手段に起因するものとは言い切れず、「服装の規範」と「着ていけるか」のズレは交通手段によって異なるという仮説は棄却された(図-5)。

ただし、各交通手段を個別に検定した上記においては統計的に有意は得られなかったものの、公共交通(バス、

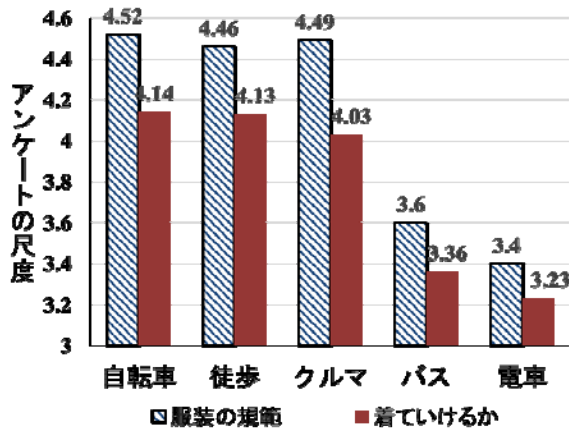


図5 交通手段別の「服装の規範」と「着ていけるか」の度合い

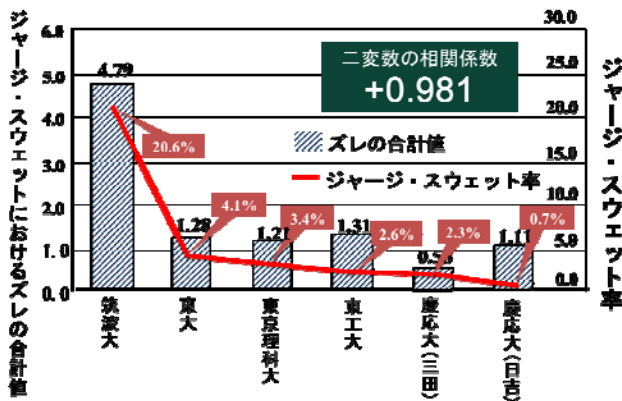


図6 大学別ジャージ・スウェットにおけるズレの合計値とジャージ・スウェット率

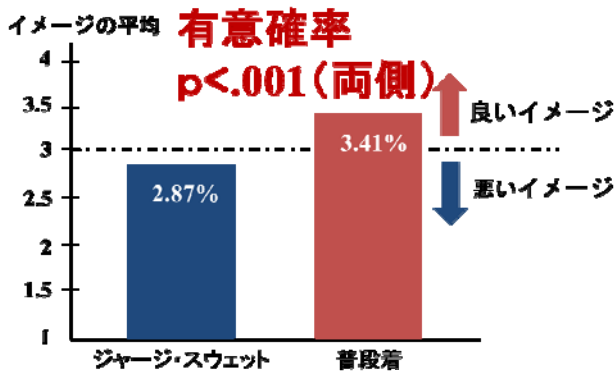


図7 服装ごとのイメージの平均

電車) とその他の交通手段 (自転車, 徒歩, クルマ) のグループにまとめて t 検定を行った結果, 統計的に有意な差が示されたため, 「服装の規範」と「着ていけるか」とのズレは, 公共交通の方がその他の交通手段より小さいことが示された。

(3) 仮説3の検証

仮説3は, 「服装の規範」と「着ていけるか」のズレが大きい学生が多い大学ほど, 大学内のジャージ・スウ

ェット率が高くなる, というものであった。

各大学の交通手段ごとの「服装の規範」と「着ていけるか」のズレの合計値と各大学のジャージ・スウェット率には図-6のように正の相関が見られ, 仮説3は検証された。つまり, 服装選びの理想と現実のズレが大きい学生が多い大学ほど, 学生のジャージ・スウェットの割合が高いことが言える。

(4) 仮説4の検証

仮説4は, ジャージ・スウェットを着ている大学生の多い大学ほど, 高校生からの大学イメージが悪化するというものであった。2種の写真のイメージ評価値の平均値の差の t 検定を行ったところ, 普段着に対するイメージの平均値の方が, ジャージ・スウェットに対するイメージの平均値よりも有意に高く, 仮説4は検証された (図-7)。

このことは, ジャージ・スウェットを着ている学生が多いと高校生からの大学イメージに悪影響を及ぼすことを意味している。これにより, ジャージ・スウェットの学生が多い大学, すなわちイメージの悪い大学への進学希望者の減少につながる可能性も考えられる。つまり, 大学生個人のジャージ・スウェットを着ることに対する「まあいっか」と思う気持ちが, 高校生の大学選択に影響する可能性があること, ひいてはその大学のイメージ悪化という社会的問題につながる可能性が考えられる。

5. おわりに

(1) 本研究の成果

本研究で推定した仮説 1~4 は一部を除き採択され, その結果, 以下の知見を得ることができた。

- ①人目を気にする度合いが高い学生ほど, 「服装の規範」と「着ていけるか」のズレは小さい
 - ②人目につく公共交通の方が, 「服装の規範」と「着ていけるか」のズレが小さい
 - ③理想と現実のズレが大きい大学の方が, 実際のジャージ・スウェット率が高くなる
 - ④ジャージやスウェットを着ている方が, 高校生からの大学イメージは悪くなる
- つまり, 人目を気にする度合いの高い学生は公共交通を利用し, 「服装の規範」と「着ていけるか」のズレが小さい一方で, 「服装の規範」と「着ていけるか」のズレが大きい学生が多いとジャージ・スウェット率が高くなり, 高校生からの大学イメージが悪化することが示された。

(2) 今後の課題

本研究の成果より、ジャージ・スウェットを着て大学へ行くことが高校生からの大学イメージを悪化させることが検証された。今後の課題としては具体的にどのようにジャージ・スウェットでの通学を減少させることができるかを検証することが挙げられる。

また、調査対象を大学生に限定せず、一般に拡張させること、調査対象の大学を関東だけでなく、地方の大学や海外の大学にも拡張させることで、得られた知見の一般化が可能になると考えられる。

本稿では取り扱うことが出来なかったが、人々の服装選択には距離や行き先のフォーマル度、同行者の属性といった他の要素も関連している可能性が高い。例えば徒歩 2 分のコンビニへ買い物に行くときは、リラックスウェアとしてのジャージやスウェットで行くこともあろうが、徒歩 15 分の駅ビル商店街に買い物に行くときはジャージやスウェットで行く人は減るだろう。今後は、単に交通手段だけでなく、距離や行き先の用務、フォーマル度等も考慮した調査分析を進めていきたい。

謝辞：本研究における大学生対象のアンケート調査は、東京大学高見淳史准教授、東京工業大学中道久美子助教、花岡伸也准教授、慶應大学藪知良准教授、東京理科大学寺部慎太郎教授のご協力を得て各大学の学生さんたちに実施したものである。ここに記して謝意を表します。また、本研究は、平成28年度筑波大学社会工学類_都市計画実習の成果をまとめたものである。この実習に関わった先生方、技官の方々、関係者の方々に謝意を表します。

参考文献

- 1) 大辞林第三版：三省堂.
- 2) 辻幸恵, 高木修, 神山進, 牛田聡子, 阿部久美子: 着装規範に関する研究(第 7 報) —着装規範同調・逸脱がもたらす感情と規範意識高低による差異—, 繊維製品消費科学, Vol.42, No.11, pp.728-724, 2001.
- 3) 神山進: 被服行動と社会心理学-装う人間の心と行動, 北大路書房, 1999.
- 4) 牛田聡子: 現代若者における自己の身体像と被服, 成安造形短期大学紀要, Vol.38, pp.83-90, 2000.
- 5) 岡田努: 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について, 教育心理学研究, Vol.47, No.4, pp.432-439, 1999.
- 6) 松原詩緒: 大学生における着装基準尺度の研究, 文化学園大学紀要.人文・社会科学研究, vol.23, pp.35-49, 2015.
- 7) 泉加代子: 高齢者の着装感情や服装への関心度と日常生活・健康状態との関係, 繊維機械学会誌, Vol.55, No.4, pp.141-148, 2002.
- 8) 谷口綾子: 大学生の服装と景観・授業態度との関連分析—筑波大学の事例, 土木学会論文集 D3(土木計画学), Vol.69, No.5(土木計画学研究・論文集第 30 巻), pp.I-309-I_316, 2013.
- 9) 菅原健介: 自意識尺度日本語版作製の試み, 心理学研究, Vol.55, No.3, pp.184-188, 1984.
- 10) 立石亜紀子: 大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態, Library and information science, No.67, pp.39-61, 2012.

(2016. 7. 31 受付)

RELATIONSHIPS BETWEEN UNIVERSITY STUDENT'S CLOTHES AND
TRAVEL MODE CHOICE
—FOCUSED ON ACCEPTANCE OF SPORTSWEAR

Ayako TANIGUCHI, Daisuke SETOU, Katsuya FUTAGAMI, Masaki IINO, Hiroki
IWAOKA, Yuki KAWASHIMA, Ryohei SHIBATA, Rikiya TAKAGI, Ononbayar
DASHDONDOG and Hironori SASAKI